Ⅲ　期（館Ⅱ期）

ＳＢ１・15・17・20，ＳＤ１・７・９・10・18，ＳＫ18・27，ＳＸ１で構成される。

当該期は，館の盛期に位置づけられる。主殿（ＳＢ１）は，３面に縁をもつ格式の高い構造に変貌し，正面には池（ＳＤ７・18）を伴う庭園が営まれる。内部を仕切る溝（ＳＤ９・10）は浅くなり，主殿前面から排除される。しかし，建物配置はⅡ期の原則が踏襲され，ＳＢ１（主殿）－ＳＢ17が東西方向に，ＳＢ17－ＳＢ15－ＳＢ20が南北方向に並ぶ。

もう１つ，当該期は廃絶時の特異な状況が特筆できる。池・土坑に多量の焼壁が廃棄され，館が火災に遭ったか，意図的に焼却処分されたことを示唆している。後者だとすれば，ＳＸ１はそのことに関連した地鎮痕跡とも推測されるが，染付の年代が半世紀ほど古く，現時点では無関係とみておく。

Ⅳ　期（館Ⅲ期）

ＳＢ８・19・21・23，ＳＤ１で構成され，他にも複数の建物跡が伴うはずである。当該期は，館の衰退期，もしくは再編期に位置づけられる。

主殿（ＳＢ19）は，身舎に接して，南側に板塀が巡らされる。池は既に埋め立てられているが，南辺中央が大きく開き，庭園とのセット関係は維持されたとみられる。しかし，簡素化したことは否めない。また，区画溝が無くなっている。

建物配置をみると，南北方向では，Ⅲ期のＳＢ20がＳＢ21に建て替えられている。しかし，東西方向に，該当する建物跡が見当たらない。また西側には，細長い南北棟（ＳＢ８）がある。

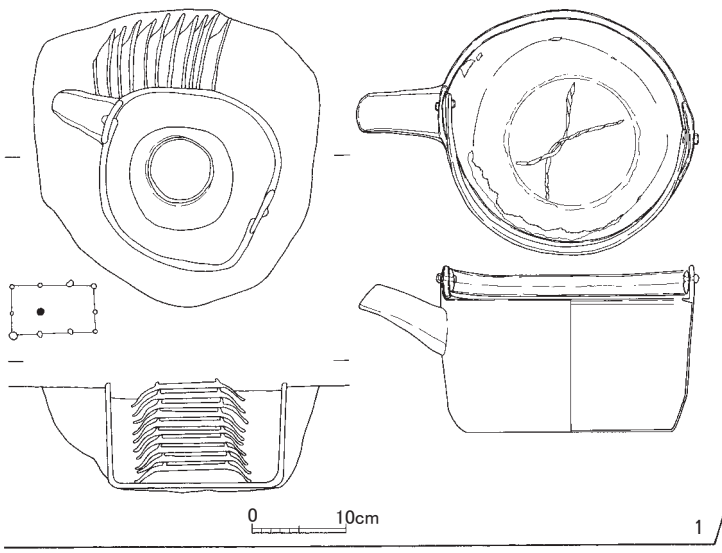
その後，18世紀後半には，館跡地が農地へ改変されたことが，１次調査で得られたＳＤ２の所見から判明している。

第５節　地鎮遺構について

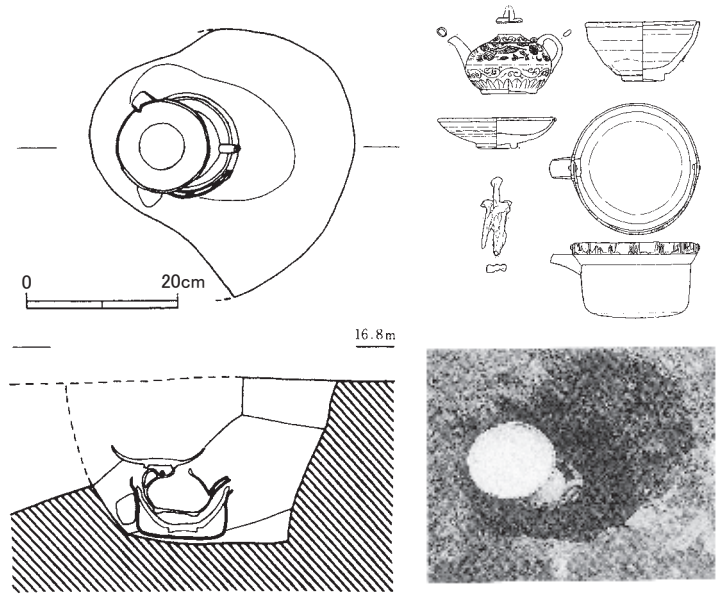
今回の成果では，館Ⅱ期に比定される地鎮遺構の発見が，関係機関の注目を集めた（図85－１）。主殿に並列した小規模な東西棟（ＳＢ17）に伴うもので，向かい合う柱穴を結んだ交点に位置していた。銅製提子内に，染付皿10枚が伏せた状態で納められ，その脇に染付小皿10枚が横倒しの状態で重ねられていた。

以下では，各地の類例をみていきたい。

最も類似した例は，神奈川県鎌倉市笹目遺跡に求められる（同図２）。銅製提子内に，上から，白磁水注の蓋・皿・水注，天目茶碗が重ねられた状態で検出され，敷地拡張に伴う地鎮遺構と推定されている（笹目遺跡発掘調査団1991・大河内勉1997）。年代は15世紀前半に比定され，本遺跡より古く位置づけられる。また，内容物は異なるが銅製提子に注目すると，内部に太刀部品を入れ，鏡がその上に置かれた事例が，富山県富山市金屋南遺跡で発見されている（同図５）。これは，旧河道跡で発見され，河川祭祀に伴う可能性が指摘されている（小林高範2001）。

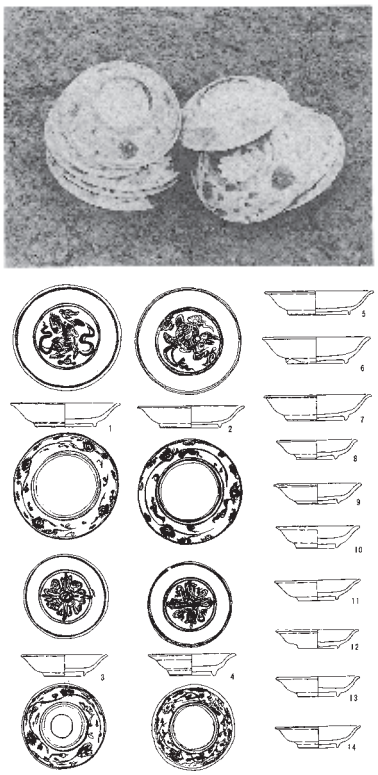


1



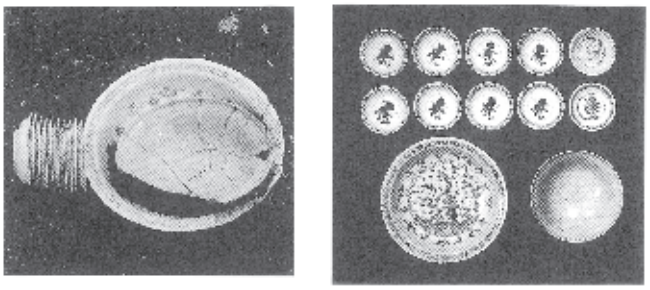
出土遺物は上から、白磁皿・白磁水注・天目茶碗・銅製銚子の順。左は釘（銹化ブロック）
（笹目遺跡調査団1991より）

2



（白根市教育委員会1985より）

3



（岩田1997より）

4

提子出土状況　提子の中には、太刀部品23点が入れられ、洲浜秋草双鳥鏡がその上に置かれていた。提子の径19センチ、高さ８センチ。

（小林2001より）

5

1　福島県喜多方市高堂太１号地鎮遺構（15Ｃ後～16Ｃ前）
2　神奈川県鎌倉市笹目埋納遺構（15Ｃ前）
3　新潟県新潟市（旧白根市）馬場屋敷１区一括遺物（15Ｃ後～16Ｃ前）
4　福井県一乗谷第42次埋納陶磁器（16Ｃ中）
5　富山県富山市金屋南（南北朝）

図85　地鎮遺構の類例

一方，銅製提子を伴わない事例では，新潟県新潟市馬場屋敷遺跡に類例が確認できる（同図３）。詳細は不明であるが，大小各７枚が伏せた状態で一括出土しており（白根市教育委員会1985），小皿はＳＸ１とまったく同類で，皿の文様構成も近似する。したがって，年代は同じ15世紀後半～16世紀前半と考えられる。さらにもう１つ，著名な福井県福井市一乗谷遺跡の類例をあげておく（同図４）。染付大皿と青磁鉢が入れ子にされ，その脇に，横倒しの状態で染付小皿10枚が重ねられている（岩田隆1997）。小皿の埋納方法は，ＳＸ１と同様である。年代は16世紀中頃に比定されている。

以上を要約すると，まず年代は，15世紀前半～16世紀中頃の限られた期間内にまとまる。しかし，今のところ，容器・内容物・埋納方法が完全に一致する例は見当たらない。また，馬場屋敷遺跡の類例から，ＳＸ１の染付皿・小皿は，阿賀川経由で搬入された可能性が高いと思われる。

いずれにせよ，全国的に珍しい発見であり，今後の資料増加を待ちたい。

第６節　方形館の構造と麻生館遺跡との比較

次に，今回判明した方形館の構造を整理し，近接する麻生館遺跡との比較を行う。

下高額館跡の構造

（１）概　要

【周囲の環境】 館の東側に長勝寺，その境内に板碑が認められる。後述するように，同寺院は下高額館を構えた渡邊左京進長勝が，至徳元（1384）年に自らの名を付して建立したという記録が文献史料に残っている。また，現在の下高額集落が南に接し，この景観は館が営まれた頃と基本的には

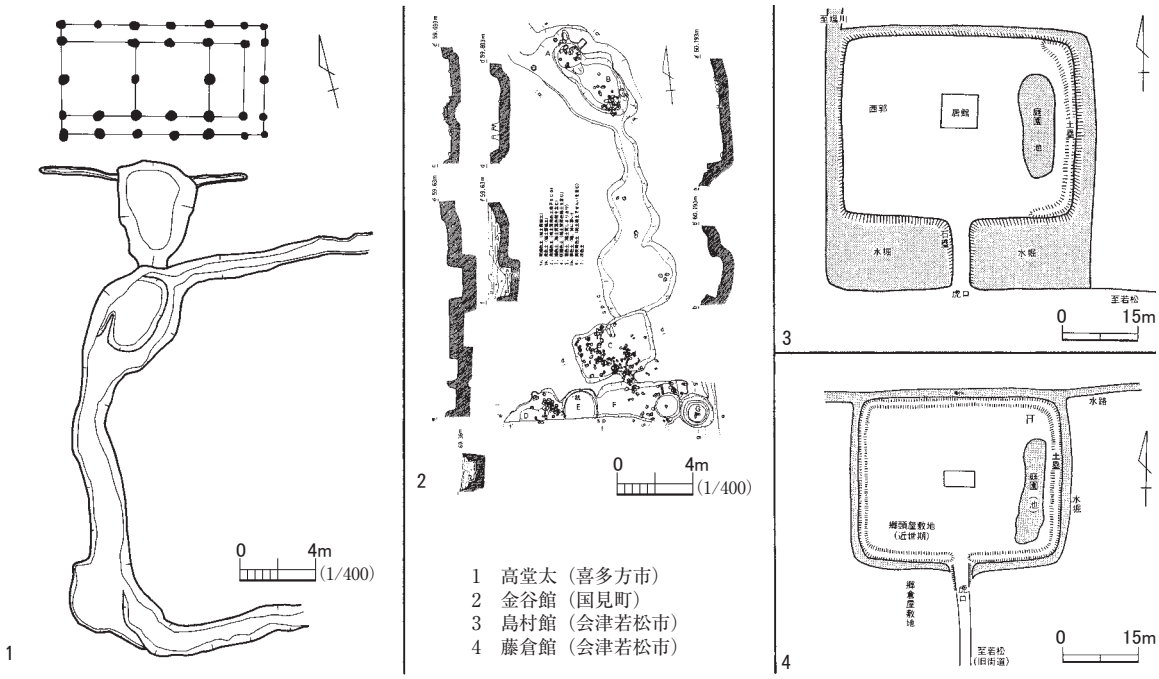


図86　池跡の類例